会長の時間　　●冨田会長

職業奉仕について

本日は、龍野商工会議所会頭の頃安雅樹様をお迎えして、職業奉仕委員会アワーとなっていますので宜しくお願い致します。

職業奉仕については、ロータリーの目的の第２項に、「職業上の高い倫理基準を保ち、役立つ仕事はすべて価値あるものと認識し、社会に奉仕する機会としてロータリアン各自の職業を高潔なものにすること」と規定され、職業に奉仕の理念を実践すべきとされています。

職業観が欧米と日本では異なります。それはマックス・ウェーバーの見解に依れば背景にある宗教から来るとされています。

カトリックでは、神の存在が絶対であり、創生紀の楽園追放による原罪意識から「労働」は神からの罰として理解され、労働に励むことは賤しいとされて来ました。

マルティン・ルターにより宗教革命が起こり、世俗内禁欲が奨励され、刻苦勉励による勤労に基づく利潤は神が喜ぶので正しいとするプロテスタントの教えが広まり、近代的資本主義精神が芽生えました。ルターの職業観は、自らの職業を天職、即ち、神の思召しと捉え、故に神が喜ばれる様に仕事に専念すべきというものでした。

これに、カルヴァン派により予定説という概念が入り、人間の運命は決まっているが神に選ばれた者であることを確信して、神から義務として与えられた職業労働に励めという職業観となりました。これは、神が中心であることには変わりがなく、ロータリーの職業観は一般にプロテスタントの職業観に近いとされています。

ユダヤ教は、労働の苦痛から解放するとした共産主義の失敗後、市場とマネーを絶対視し、国家を否定したグローバリズムを展開しました。

日本の伝統的職業観には、お金は穢れという思想があり、生産労働や倫理を重んじる為、このユダヤ教的なグローバリズムと合致することはありません。

保守論客によれば、日本の伝統的職業観は、各自が分を尽くすことが国を繁栄させ、道義を重んじ、人を能力で差別せず個性を尊重することで進歩に繋げるという考えです。そして、古から日本は臣民一体の考えが強く、神々も天皇も自ら稲作に従事し共同体精神を持ち勤労を尊ぶ伝統があり、職業が神事でもありました。従って、日本の職業観は、プロテスタント以上にロータリーの目的に近いものと思います。

先日、能登半島地震からの報道番組で、被災者の「職業を持つことは、経済的支えであるばかりではなく、精神的支えであり、人との繋がりです」という言葉が印象に残りました。そして、この様な職業観を持った人々に応えるのがロータリーの職業奉仕の使命と感じました。